

(1)

昭和21年7月10日第3種郵便物認可

論

高校生の旅立ち

魅力ある郷土づくりを考えよう

紀南各地の高校で2日、卒業式があった。4月になれば、就職や進学で親元を離れ、県外に出る若者も多い。彼、彼女らにとつて郷里とは何か。卒業生の前途を祝福するとともに、あらためて郷土の魅力を考えたい。

紀伊民報は卒業式を前に、田辺地域の6校2分校を卒業する生徒から、将来の夢を聞き取った連載「旅立ちを前に」を掲載した。神島高校の竹邊歩美さんは昨秋に東京であったコンテスト「絶品うまいもん甲子園」の決勝で梅を使った丼を出品、仲間とともに審査員特別賞を受賞した。卒業後は医療従事者として貢献したいと看護師を目指す。

同じく看護師を第一の目標に考えているのは田辺高校の畑本満里奈さん。米国での交流事業で培った積極性を生かし、大学進学後は「さまざまな可能性にも挑戦したい」と話す。

部活動と警察官を目指す勉強に励んだ南部高校の林昂志君は「安心して暮らせる和歌山にしたい」と県警に就職する。

同じく県警への就職を決めた熊野高校の山中十門君は3年間、柔道に励んだ。「体を張って仕事に頑張りたい」と真剣な表情だ。弓道に打ち込んだ田辺工業高校の下平直輝君は、高校総体出場後、長い時間スランプを味わった。県内に工場のある企業に就職し、悲

願の国体出場を夢見ている。

南紀高校の新崎朔也君は、県立田辺産業技術専門学院に進学。各種検定試験を受けようと自主勉強に励んでいる。卒業生が1人という南紀高校周参見分校の長洲好太郎君は大学に進学し、学芸員などを目標そうと考えている。

南部高校龍神分校の野尻麻緒さんは、作業療法士の夢に向かって出発する。人と話すのが苦手だったが、小規模校ならではの寮の共同生活や住民との触れ合いを通じて苦手を克服、自信を付けた。

高校で培ったこうした経験を糧に、卒業後も夢に向かってほしい。進学する人は、社会に役立つことを学び、将来への力を蓄えること。就職する人は、少々の失敗にはくじけず、周囲への感謝を忘れずに頑張してほしい。

県内では約7800人が公立高

校を卒業。ほぼ半数が大学・短大へ進学する。専門学校への進学率は約25%、就職は約20%。その結果、高校卒業を機に半数以上が県外に出ていく。

だからこそ一度県外に出た若者に大学卒業後、再び地元へ戻ろうと選択してもらえる地域をどうつくるかが課題になる。県政の将来を左右するといってもよい。

和歌山大学地域連携・生涯学習センターの西川一弘講師(36)は「紀南は魅力ある地域なのに、それが若者に伝わっていない」と指摘。地域産業の実態や郷土で生きることの魅力をもっと具体的に伝える工夫が必要だという。

旅立つ彼らが郷土で骨を埋めようと思える魅力をどうつくるか。それをどう伝えるか。生まれ育った土地の価値を再確認することが始めなければならない。(N)